

●日本の主な火山活動

平成 17 年（2005 年）5 月の主な火山活動は次のとおりである。

【噴火した火山】

- ・ 三宅島 : 18 日にごく小規模な噴火が発生した。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2004 年秋以降、1 日あたり 2 千～5 千トン程度で、依然として多い状態が続いている。
- ・ 桜島 : ごく小規模な噴火は時折発生したが、爆発的噴火等¹⁾は発生しなかった。A 型地震のやや多い状態が続いている。
1) 桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発的な噴火もしくは一定の規模以上の噴火の回数を桜島の噴火の回数として計数している。
- ・ 諏訪之瀬島 : 噴火が 20～21 日及び 26～31 日に発生した。30 日から噴火活動が活発になり 30～31 日には爆発的噴火が時々発生した。

【活動が活発な状態にあるか、もしくは観測データ等に変化のあった火山】

- ・ 雌阿寒岳 : ポンマチネシリ 96-1 火口の高温状態が続いている。
- ・ 十勝岳 : 62-2 火口は噴煙活動が活発で、高温状態が続いていたと推定される。
- ・ 樽前山 : A 火口及び B 噴気孔群の高温状態が続いている。
- ・ 草津白根山 : 11～12 日に地震がやや増加した。
- ・ 浅間山 : 噴火は発生しなかったが、山頂火口の噴煙活動は引き続き活発で、微弱な火映がほぼ連日観測された。火山性地震及び微動のやや多い状態が続いている。
- ・ 福徳岡ノ場 : 18 日に変色水が確認された。
- ・ 阿蘇山 : 13 日に火山活動度レベルを 3（小規模噴火の可能性）から 2（やや活発な火山活動）に変更した。中岳第一火口浅部の熱的な活動は引き続き活発で、31 日には火口底の一部で赤熱現象が観測された。
- ・ 霧島山 : 御鉢火口の噴気活動は依然としてやや活発な状態が続いている。
- ・ 口永良部島 : 火山性地震のやや多い状態が続いている。

以下、各々の火山の主な活動について解説する。

図表その他において、噴火した火山を▲、活動が活発な状態にあるか、もしくは観測データ等に変化のあった火山を●、その他記事を掲載した火山を◇、火山活動度レベルを①②等の丸付き数字で表記する。また、末尾の資料として、期間中に発表した火山情報の一覧表を掲載する。

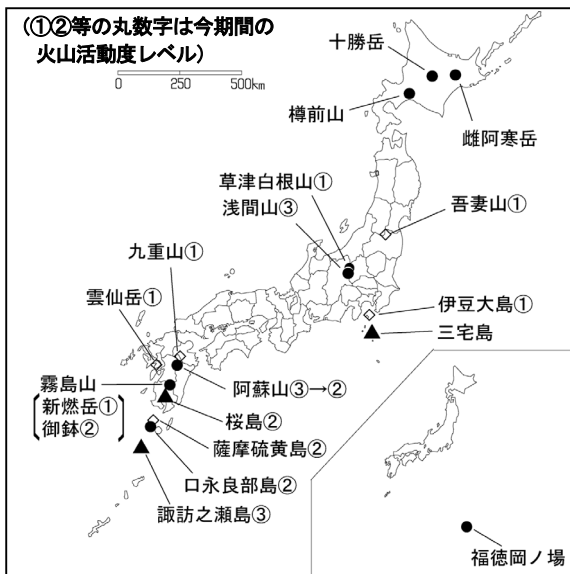


図 1 今回記事を掲載した火山

火山名	平成16年(2004年)						平成17年(2005年)					
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
雌阿寒岳				●	●	●	●	●	●	●	●	●
十勝岳				●	●	●	●	●	●	●	●	●
樽前山				●	●	●	●	●	●	●	●	●
草津白根山							●					●
浅間山	●	●	●	▲	▲	▲	▲	●	●	●	●	●
富士山	●											
伊豆大島	●	●										
三宅島	●	●	●	●	●	▲	▲	●	●	●	▲	▲
伊豆鳥島		●	●			●					●	
西之島												
硫黄島	●											
福徳岡ノ場	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
阿蘇山	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	▲	●
霧島山	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
桜島	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	●	▲	▲	▲
薩摩硫黄島	▲	●	▲	▲	▲	▲	▲					
口永良部島	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
諏訪之瀬島	▲	▲	●	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
硫黄島	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

表 1 過去 1 年間に活動があった火山

火山名	平成16年(2004年)						平成17年(2005年)					
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
吾妻山								①	①	①	①	①
草津白根山								①	①	①	①	①
浅間山	②	②	①	②	②	③	③	③	③	③	③	③
伊豆大島	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
九重山								①	①	①	①	①
阿蘇山	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	③	③
雲仙岳	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
霧島山(新燃岳)								①	①	①	①	①
御鉢								②	②	②	②	②
桜島	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
薩摩硫黄島								②	②	②	②	②
口永良部島								②	②	②	②	②
諏訪之瀬島								③	③	③	③	③

表 2 過去 1 年間の各火山の火山活動度レベル

各火山の活動解説

火山名の後の〔噴火・爆発・噴煙・噴気・地震・微動・空振・地殻変動・熱・火山ガス等〕は、掲載した理由となった火山現象を示す。

● 雌阿寒岳 〔熱〕

25 日に北海道立地質研究所が実施した調査によると、ポンマチネシリ 96-1 火口の温度は約 270℃²⁾と依然として高温であった。監視カメラ³⁾による観測では噴煙の状況に変化はなく、色は白色で高さは火口縁上概ね 100m で推移した。

火山性地震及び微動の発生状況は引き続き静穏で、地殻変動観測では火山活動に起因すると考えられる変化はなかった。

2) 赤外放射温度計による。赤外放射温度計は物体が放射する赤外線を感じて温度を測定する測器であり、熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

3) ポンマチネシリ 96-1 火口の南南東約 16 km に設置。

● 十勝岳 〔噴煙・熱〕

62-2 火口は、噴煙活動の活発な状態が続き、高温の状態が続いていたと推定される。監視カメラ⁴⁾による観測では、噴煙は白色で高さは概ね火口縁上 200m で推移した。

火山性地震及び微動の発生状況は引き続き静穏で、地殻変動観測では火山活動に起因すると考えられる変化はなかった。

4) 62-2 火口の北北西約 6 km に設置。

● 樽前山 〔熱〕

25 日に札幌管区気象台が実施した調査観測によると、A 火口の最高温度は約 560℃²⁾（前回 2004 年 10 月 25 日の観測では約 620℃）、B 噴気孔群の最高温度は約 440℃⁵⁾（前回 2004 年 10 月 15 日の観測では約 430℃）で、いずれも高温の状態であった。A 火口及び B 噴気孔群の噴煙の状況には特に変化はなかった。

監視カメラ⁶⁾による観測では噴煙の状況に変化はなく、色は白色で高さは火口縁上概ね 100m

で推移した。

火山性地震の発生状況に特に変化はなく、火山性微動は観測されなかった。また、地殻変動観測では火山活動に起因すると考えられる変化はなかった。

5) 熱電対温度計による。熱電対温度計はセンサーを直接熱源に当てて温度を測定する測器である。

6) 山頂ドームの南南東約 12 km に設置。A 火口は山頂ドームの南東縁、B 噴気孔群は同南西縁に位置する。

◇ 吾妻山

火山活動度レベルは 1（静穏な火山活動）であった。

地震活動、噴気活動、地殻変動等の観測データには特段の変化はなく、静穏に経過した。

● 草津白根山 〔地震〕

火山活動度レベルは 1（静穏な火山活動）であった。

11 日 20 時～12 日 03 時に、白根山の山体浅部が震源と推定される規模の小さい地震がやや多く発生した。1 日あたりの地震回数は 11 日 15 回、12 日 7 回であったが、その他の日は 0～1 回と少ない状態であった。火山性微動は観測されなかった。

監視カメラ⁷⁾による観測では噴煙は観測されなかった。また、地殻変動観測では火山活動に起因すると考えられる変化はなかった。

7) 湯釜の南約 1 km の逢ノ峰に設置。

● 浅間山 〔噴煙・火映・火山ガス・地震・微動〕

噴煙活動は引き続き活発で、微弱な火映がほぼ連日観測され、火山性地震及び微動のやや多い状態が続いている。火山活動度レベルは 3（山頂で小～中噴火が発生する可能性）であった。

期間中、噴火は観測されなかった。

山頂火口からの噴煙活動は引き続き活発で、白色噴煙が連続して噴出しており、高さは最高で火口縁上 1,000m まで上がった。また、夜間に山麓の監視カメラ⁸⁾で微弱な火映がほぼ連日観測されており、火口内は引き続き高温状態が継続していると推定される（図 2）。

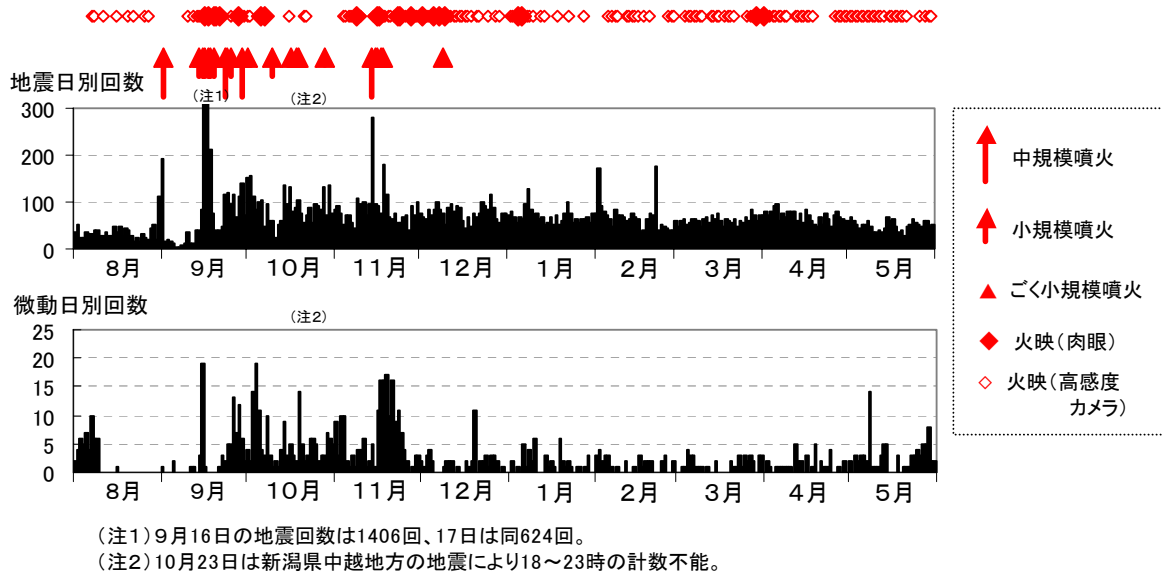


図2 浅間山 2004年8月～2005年5月の噴火、火映、地震及び微動の日別発生状況

19日に行った火山ガス観測では、二酸化硫黄の放出量は1日あたり約1,400～1,900トンで、2004年12月～2005年3月頃の1日あたり2,000～5,000トンに比べると少なくなっている（図3）。

10日及び25日に上空から行った観測⁹⁾によれば、火口内の詳細な状況は噴煙量が多いため確認できなかったが、25日の観測で確認できた範囲（火口底の南側から西側にかけての一部）では、前期間の観測時（4月27日）と比べて地形や噴気の状況に大きな変化はなかった。また、火口周辺の地形変化や火口外への新たな噴出物は認められなかった。

火山性地震の回数は、前期間の中旬頃からやや減少する傾向が見られるものの依然としてやや多い状態が続いており、1日あたり27～69回で推移した。震源はほとんどが山頂火口直下の深さ約1～3kmに集中しており、前期間までと比べ特段の変化はなかった。火山性微動の回数もやや

多い状態が続いており、1日あたり0～14回で推移した（図2）。

傾斜計及びGPSによる地殻変動観測、光波測距観測では火山活動に起因すると見られる変化はなかった。

- 8) 高感度カメラ。気象庁及び国土交通省関東地方整備局利根川水系砂防事務所が山麓に設置。
- 9) 10日は群馬県の協力により、気象庁と東京大学が共同で実施。25日は長野県消防防災ヘリコプターの協力により、気象庁と産業技術総合研究所が共同で実施。

◇ 伊豆大島

火山活動度レベルは1（静穏な火山活動）であった。

地震活動、噴煙活動、地殻変動等の観測データには特段の変化はなく、静穏に経過した。

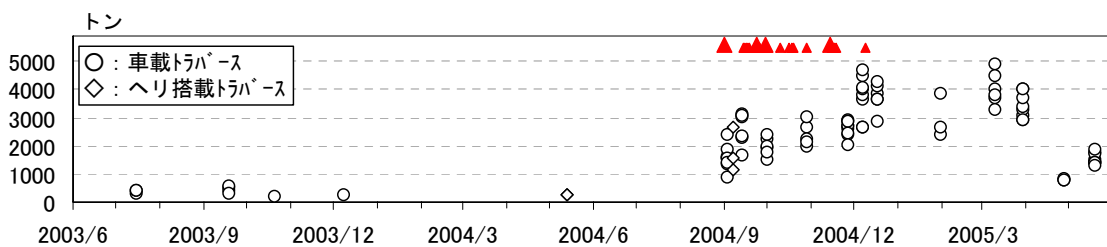


図3 浅間山 二酸化硫黄放出量の推移（1日あたりの量に換算）（2003年6月～2005年5月）
 大きい▲は中爆発、小さい▲は小噴火以下を示す。

▲ 三宅島 [噴火・降灰・噴煙・火山ガス・熱・地震]

多量の二酸化硫黄の放出が続いた。18 日にごく小規模な噴火が発生した。

18 日にごく小規模な噴火が発生した。18 日午前に行った現地調査で、山頂火口の北～北北東側約 4 km（神着地区）の狭い範囲でごく微量の火山灰が確認された。噴火時刻は、空振を伴う振幅のやや大きな低周波地震が観測された 02 時 41 分頃と推定されるが、その当時の噴煙は白色で高さは火口縁上 200m、噴煙量に特段の増加は見られなかった。噴火が発生したのは前期間の 4 月 12 日のごく小規模な噴火以来であった。

噴煙活動は引き続き活発で、白色噴煙が山頂火口から連続的に噴出した。期間中の噴煙の最高は火口縁上 700m であった（前期間の最高は火口縁上 1,000m）。

上空から実施した火山ガスの観測¹⁰⁾では、二酸化硫黄の放出量は 1 日あたり 2,500～5,400 トンと依然として多い状態であった（図 4）。なお、三宅村の火山ガス濃度観測でも、山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

24 日に上空から実施した山頂火口内及び周辺の観測¹⁰⁾では、山頂火口周辺及び火口内の状況に大きな変化はみられなかった。赤外熱映像装置¹¹⁾による観測では、火口内の最高温度は 210℃で大きな変化はなく引き続き高温であった。また、全磁力の連続観測では特に変化はみられず、地下の熱的な状態に大きな変化はないものと考えら

れる。

地震活動は、上記の噴火を伴う低周波地震のほか、31 日に一時的な増加があり 99 回観測されたが、その他の日は 1 日あたり 0～27 回と少ない状態で推移した。31 日は 14～21 時に山頂火口直下を震源とするやや低周波地震が増加した。その間の 17 時 40 分には空振を伴う振幅のやや大きな低周波地震が観測され、三宅村神着で震度 1 が観測された。しかしながら、地震発生時の噴煙は白色で噴煙量の増加は認められず、その直後に行った現地調査でも降灰は確認されなかった。また、その他の観測データにも特に異常は見られなかった。また、19 日 10 時 05 分に山頂火口直下を震源とするやや大きな高周波地震が発生し、三宅村神着で震度 1 が観測された。この地震が発生した前後で地震の増加はみられず、火山活動に特段の変化はみられなかった。

G P S による地殻変動観測では、山体浅部の収縮を示す地殻変動は 2002 年夏頃に緩慢となり、それ以降大きな変化はみられていない。

10) 17 日に航空自衛隊、24 日に東京消防庁の協力により気象庁が実施。17 日は天候不良のため火口内の状況は不明であった。

11) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器であり、熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

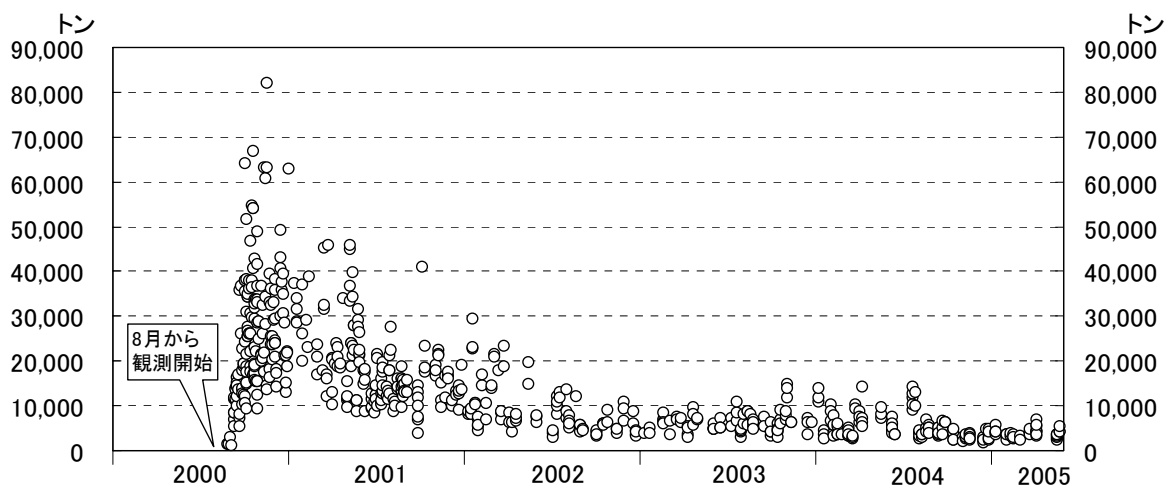


図 4 三宅島 二酸化硫黄の放出量（1日あたりの量に換算）（2000 年 8 月～2005 年 5 月）
2002 年秋以降、1 日あたり 3 千～1 万トン程度で横ばい傾向を示していたが、
2004 年秋以降は、1 日あたり 2 千～5 千トン程度とやや少なくなっている。

● 福徳岡ノ場 [変色水]

海上自衛隊が 18 日に行った上空からの観測によると、福徳岡ノ場付近の海面に火山活動によると思われる薄い緑色の変色水が確認された。変色水は福徳岡ノ場付近から北方に幅約 700m、長さ約 9 km にわたって帯状に広がっていた。福徳岡ノ場付近で変色水が確認されたのは今年 3 月 9 日以来である。

◇ 九重山

火山活動度レベルは 1（静穏な火山活動）であった。

地震活動、噴煙活動とも静穏であった。その他の観測データにも特段の変化はなかった。

● 阿蘇山 [赤熱¹²⁾・熱・土砂噴出・微動・地震]

13 日に火山活動度レベルを 3（小規模噴火の可能性）から 2（やや活発な火山活動）に変更した。中岳第一火口浅部の熱活動は引き続き活発な状態が続いており、31 日には火口底の一部で赤熱現象¹²⁾が観測された。

4 月 15 日以降噴火がなく、5 月 7 日頃から火山性連続微動の振幅が小さくなる（後述）など活動にやや低下が見られたことから、5 月 13 日に火山活動度レベルを 3（小規模噴火の可能性）から 2（やや活発な火山活動）に変更した。

期間中、噴火は観測されなかった。

中岳第一火口（以下、火口）では、監視カメラ¹³⁾による観測で、31 日夜に火口底北側噴気孔付近で赤熱現象が観測された。赤熱域はごく一部と狭く、その他の現象には特段の変化は見られなかった。火口底で赤熱現象が観測されたのは 1992 年 12 月 30 日以来であった。火口内の湯だまり¹⁴⁾は、量は減少傾向にあるものの約 2 割で推移し、色は 7 日に黒灰色から灰色に、26 日に再び黒灰色に変わったのが確認された。色が灰色に変化したのは降雨の影響によると推定される。湯だまりの中央部付近で高さ約 5 m、その他で高さ 2～3 m の土砂噴出が多数観測された。湯だまりの表面温度は 71～77℃²⁾で依然として高い状態であった（前期間は 66～78℃）。

火山性連続微動は期間を通して継続し、期間の初めから 7 日頃まで振幅のやや大きい状態が続いた。孤立型微動の月発生回数は 3,269 回と前期間（4,743 回）より減少したが、依然としてやや多い状態であった。火山性地震の月発生回数は 216 回で、前期間（865 回）より減少した。

噴煙の状況は、期間を通じて白色で、噴煙高度の最高は火口縁上 600m と通常と比べ変化はなかった。GPS による地殻変動観測及び今期間実施した全磁力の繰り返し観測では火山活動に起因する変化はみられなかった。

12) 地下から高温の火山ガスなどが噴出する際に、周辺の地表が熱せられて赤く見える現象。阿蘇山では、赤熱域が拡大すると、火孔が開孔し、噴火活動が活発化したことがある。

13) 阿蘇火山博物館が中岳第一火口縁に設置。

14) 湯だまり：活動静穏期中岳第一火口内には、地下水などを起源とする約 50～60℃の緑色のお湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいる。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少がみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起こり始めることが知られている。

◇ 雲仙岳

火山活動度レベルは 1（静穏な火山活動）であった。

地震活動、噴煙活動、地殻変動等の観測データには特段の変化はなく、静穏に経過した。

● 霧島山 [噴気]

新燃岳の火山活動度レベルは 1（静穏な火山活動）、御鉢の火山活動度レベルは 2（やや活発な火山活動）であった。

御鉢火口内で 2003 年 12 月に確認された噴気孔からの噴気活動は、消長を繰り返しながらも依然としてやや活発で、監視カメラで火口縁上 100～200m まで上がる噴気が時々観測された。

新燃岳付近及び御鉢付近の地震活動は低調で、火山性微動は観測されなかった。GPS による地殻変動観測では火山活動に起因する変化はみられなかった。

▲ 桜島 [噴火・地震・地殻変動]

火山活動度レベルは 2（比較的静穏な噴火活動）であった。

期間中、ごく小規模な噴火は時折発生したが、爆発的噴火等¹⁵⁾は観測されなかった（爆発的噴火等は前期間もなし）。火山灰を含んだ灰白色の噴煙が時折観測され、噴煙の最高は 24 日に観測された火口縁上 300m であった。鹿児島地方気象台（南岳の西南西約 11km）で降灰は観測されなかった（前期間もなし）。

火山性地震は総じて少ない状態にあるが、A 型地震¹⁶⁾の発生はやや多い状態が続いており、今期間は 13 回発生した（前期間は 17 回）。A 型地震の震源は南岳火口周辺の海面下 0～5 km 付近に分布した。

G P S による地殻変動観測では、連続観測で、昨年 11 月頃から今年 2 月にかけて、山頂を囲む各観測点間の距離の伸びにやや加速する傾向がみられていたが、3 月以降は伸びの傾向が緩やかになった。

15) 桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発的な噴火もしくは一定の規模以上の噴火の回数を桜島の噴火の回数として計数している。今期間及び前期間はこれらに該当する噴火は観測されなかった。

16) 火山性地震には、通常の構造性地震と同じような P 波、S 波が明瞭で高周波の波動からなる A 型地震と、位相が不明瞭な低周波の B 型地震がある。桜島の A 型地震は、マグマ等の貫入に伴い地殻が破壊されるために発生していると考えられ、B 型地震はマグマ内の火山ガスの発泡等によって火道内で発生する地震とされている。過去の活動において、A 型地震のやや多い状

態が続き、震源が浅部に移動した後、B 型地震が増加し噴火活動が活発になった事例がある。

◇ 薩摩硫黄島

火山活動度レベルは 2（やや活発な火山活動）であった。

今期間は、火山性地震及び微動が時々発生したが、地震活動は概ね低調で、噴煙活動等の観測データにも特段の変化はなかった。

● 口永良部島 [地震・微動]

火山活動度レベルは 2（やや活発な火山活動）であった。

火山性地震は引き続きやや多い状態が続き、月回数は 100 回と前期間（72 回）よりやや増加した。その内、震源の位置が決められた地震は 4 個で、いずれも新岳火口付近のごく浅い所に分布した。火山性微動は継続時間の短いものが時々発生し、月回数は 35 回と前期間（23 回）よりやや増加した。5 月 1 日に 1 日あたり 8 回とやや多く観測されたがその他の日は 0～4 回で推移した。

監視カメラ（新岳の北西約 4 km に設置）による観測では、噴気は観測されなかった。

▲ 諏訪之瀬島 [噴火・爆発・降灰・微動]

下旬に噴火活動が活発になった。火山活動度レベルは 3（小規模な噴火が発生）であった。

噴火が 20～21 日及び 26～31 日に観測された。30 日夕方からは活動が活発になり、爆発的噴火（以下、爆発）が時々観測された。活動の活発な状態は 6 月 3 日（期間外）まで続いた。爆発は 30 日に 4 回、31 日に 6 回、6 月 1 日（期間外）

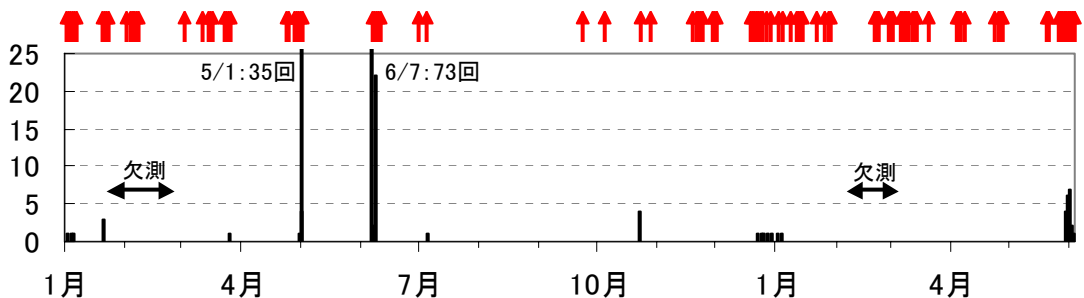


図 5 諏訪之瀬島 爆発地震の日別発生回数及び噴火の発生状況
 (2004 年 1 月～2005 年 6 月 3 日 (期間外)) ↑は噴火発生日
 爆発地震は爆発的噴火に伴って発生する地震。
 2004 年 1 月 22 日～2 月 26 日、2005 年 2 月 6 日～3 月 3 日は観測機器故障のため欠測。

に 7 回観測され、5 月 30 日～6 月 3 日（期間外）の合計の爆発回数は 20 回であった。爆発が観測されたのは、今年 1 月 4 日以来であった（図 5）。

十島村役場諏訪之瀬島出張所（以下、出張所）からの報告及び監視カメラ¹⁷⁾の観測によると、期間中の噴煙の最高は 31 日の火口縁上 1,200m であったが、噴火活動が活発となった 5 月 30 日～6 月 3 日の間では 6 月 1 日 09 時頃（期間外）に出張所から火口縁上 3,000m の噴煙が確認された。出張所によると、20 日及び 30 日に集落（御

岳の南南西約 4 km）で降灰があった。

火山性連続微動が、23 日に観測された他、26 日夕方からは振幅のやや大きいものが期間の終わりまで断続的に観測された。振幅のやや大きい火山性連続微動は 6 月 3 日（期間外）まで観測された。

17) 御岳の北北東約 25km の中之島に設置。

資料 1 2005 年 5 月の火山情報発表状況

火山名	情報の種類及び号数	発表日時	概要
浅間山	火山観測情報第 124 号 ↓（1 日 1 回発表）	1 日 16:00 ↓	前日及び当日 00 時～15 時の活動状況（噴火はなし、噴煙・火映・地震・微動・地殻変動の状況・上空の風の予想）。火山活動度レベルは 3。第 133 号、148 号には上空からの火口観測の結果、第 143 号には火山ガス観測の結果を含む。
	火山観測情報第 154 号	31 日 16:00	
三宅島	火山観測情報第 239 号 ↓（1 日 2 回発表）	1 日 09:30 ↓	前日 15 時～当日 09 時もしくは当日 09～15 時の活動状況、及び上空の風の予想。
	火山観測情報第 272 号	17 日 16:30	
	火山観測情報第 273 号	18 日 09:40	18 日 02 時 41 分頃ごく小規模な噴火発生。前日 15 時～当日 09 時の活動状況、及び上空の風の予想。
	火山観測情報第 274 号 ↓（1 日 2 回発表） 火山観測情報第 300 号	18 日 16:30 ↓ 31 日 16:30	前日 15 時～当日 09 時もしくは当日 09～15 時の活動状況、及び上空の風の予想。
阿蘇山	火山観測情報第 22 号	2 日 11:30	火山活動は活発な状態が継続（4 月 15 日以降噴火はなし、連続微動継続し振幅やや大きい）。火山活動度レベルは 3。
	火山観測情報第 23 号	6 日 11:00	
	火山観測情報第 24 号	9 日 11:15	
	火山観測情報第 25 号	13 日 15:00	火山活動度レベルを 3 から 2 に変更。小規模噴火の可能性は低くなる。
	火山観測情報第 26 号	20 日 11:00	やや活発な火山活動が継続（連続微動継続、湯だまりの表面温度高い）。火山活動度レベルは 2。
	火山観測情報第 27 号	27 日 11:00	
口永良部島	火山観測情報第 19 号	6 日 14:00	火山活動はやや活発な状態が継続。火山活動度レベルは 2。
諏訪之瀬島	火山観測情報第 2 号	31 日 09:50	昨日（30 日）から噴火活動活発（爆発的噴火が発生）。火山活動度レベルは 3。

● 世界の主な火山活動

平成 17 年（2005 年）5 月に噴火の報告された主な火山（日本を除く）は下図のとおりである。このうち、活動が活発であった主な火山は以下のとおりである。

アナタハン火山（マリアナ諸島）（図中 A）

5 日と 11 日にやや大きな噴火があった。噴煙の高さは海拔約 4～5 km 程度であったが、5 日の噴火では噴煙が火山から北に約 900km、南へ約 100km 拡がり、11 日の噴火では西～北西に約 500km 拡がった。

コリマ火山（メキシコ）（図中 B）

中旬から噴火活動が活発になり、23 日と 30 日に規模の大きな噴火があった。23 日の噴火では噴煙が海拔約 10km まで上がり、火砕流が山腹を 4～5 km 流下した。30 日の噴火でも噴煙が海拔約 9 km まで上がり、火砕流が発生した。30 日の噴火では、降灰によりコリマ市の空港が閉鎖された。

フェルナンディナ火山（ガラパゴス諸島、エクアドル）（図中 C）

13 日から噴火が始まり、山腹に割れ目が約 4.5km にわたって形成され、14 日には、そこから流出した溶岩が山腹を流下しているのが確認された。

（以上、米国スミソニアン自然史博物館の GVP（Global Volcanism Program）による。日付は全て現地時間。火山名の読み方は、原則として気象庁：「火山観測指針（参考編）」による。）

